

日本比較文化学会 2018年度 東北支部大会

2019年3月21日(木、春分の日)14:30~17:30

仙台市戦災復興記念館

4階第5会議室

- ◆ 開会の挨拶 (14:30~14:35) 伊藤 豊 (山形大学)
- ◆ 研究発表 (14:35~16:30、1名あたり質疑応答も含めて25分)

司会 伊藤 豊

- 阿部 純 (東北大学大学院)
アメリカの「正義」と戦後日本—冷戦期における日本のリドレス受容をめぐる—
- 武 暁桐 (ハイデルベルク大学/東北大学大学院)
1926年—1937年「晨報系」新聞と当時政治状況の関係について

< 休 憩 >

司会 古河 美喜子 (日本大学)

- 佐藤 和博 (弘前学院大学)
Sherwood Anderson の文体について考える

司会 高橋 栄作 (高崎経済大学)

- 河内 健志 (高崎経済大学)
名詞句内の補部と付加部の区別について

< 休 憩 >

- ◆ 支部総会 (16:40~17:25)
- ◆ 閉会の挨拶 (17:25~17:30) 佐藤 静 (宮城教育大学)



(会場)
仙台市戦災復興記念館(仙台市青葉区大町 2-12-1)

- タクシー: 仙台駅西口から約5分。
- 地下鉄: 仙台駅から東西線八木山動物公園行き、大町西公園駅で下車。東1番出口から徒歩6分。
- バス: 仙台市営バス、仙台駅西口バスプールのりばから、東北公済病院・戦災復興記念館前で下車し、徒歩5分(10番のりば 茂庭台、折立/西花苑行〔西道路経由〕; 15-1番のりば 全路線; 15-2番のりば 全路線)
- 徒歩: 仙台駅西口から約25分。

アメリカの「正義」と戦後日本 —冷戦期における日本のリドレス受容をめぐる—

阿部 純(東北大学大学院)

近年、アメリカ日系人のリドレスをめぐるナラティブの解体と再構築が進められている。周知の通り、日本軍による真珠湾攻撃後、アメリカ本土では約 12 万人の日本人と日系人が強制収容所へと送られた。この強制収容政策に対する謝罪と金銭的償いを求めた日系人は、「過ちを正す」ことを含意する「リドレス」という言葉を掲げ運動を進めた。従来、日系人による「リドレスの獲得」は「成功」として語られてきたが、近年ではリドレスを批判的に捉えなおす傾向が起きている。最新の研究は、冷戦終結期にアメリカが道徳的に優れた国であることを世界に示すため、アメリカ政府がリドレスを利用したと指摘する。しかしながら、他国に対するアメリカ政府側の思惑がリドレスに組み込まれていたのだとすれば、広く受容する側との間に如何なる「交渉」と「再概念化」が生じたのかも、考えるべきだろう。そこで本研究では、冷戦期という国際的文脈に着目しつつ、戦後、アメリカの同盟国となった日本においてリドレスなる思想が如何に私物化されたのかを検討する。

1926 年—1937 年「晨報系」新聞と当時政治状況の関係について

武 暁桐(ハイデルベルク大学／東北大学大学院)

中国本土の政論紙は 1920 年代の軍閥混戦状態においてある程度の言論の自由を保っており、その一翼を担った代表的な新聞社—晨報社を誕生させた。しかし、それと同時に新聞の黄金期の最中に各種政府による新聞の積極的利用を通じたプロパガンダ政策も喚起され、その状況下で晨報社が強く左右されていた。

本発表は 1916 年から 1937 年まで、北京(後北平)において発行されていた、一様に「晨報」という名称を冠した『晨報』『新晨報』『北平晨報』の三つの新聞に焦点を当てる。晨報系新聞は三度も社名が変更され、そしてその新聞紙の性格も国民党と北洋政府と権利交代、閻錫山と張学良の権力交代、中華民国政府と日本華北政府と権力交代によって変遷してきた。

本発表はこれらの新聞の発行経緯と論調の変化に注目し、当時北京をめぐる緊迫した政治変化と晨報系新聞の関係を明らかにする。

Sherwood Anderson の文体について考える

佐藤 和博(弘前学院大学)

アメリカの小説家 Sherwood Anderson(1876-1941)の作品の文体について考察する。扱う作品は主として、短編集 *Death in the Woods and Other Stories* (1933) であり、時間の余裕があれば、*Winesburg, Ohio*(1919)も視野に入れたい。

Anderson の文体について、西田実は、『アメリカ文学史』(成美堂)のなかで、「マーク・トウエインに始まった口語体のアメリカ英語をさらに洗練させたもので、やがてヘミングウェイにひきつがれる。」と述べて、高く評価している。

Anderson の「洗練された」文体とは、具体的に、どのようなところであろうか?例えば、彼の短編のなかで、代表的作品である“*Death in the Woods*”(「森の中の死」)の冒頭のいくつかのパラグラフを読んでみる。そこには、確かに、興味深い単語の使い方、センテンスの組み合わせによるリズムの変化の例が指摘できる。それらが、「洗練」につながるのかもしれない。

今回の発表では、特に、パラグラフの中で、長いセンテンスと短いセンテンスを、いかに Anderson は、配列しているか、を中心にして、具体的に例をあげながら、論じていく予定です。

名詞句内の補部と付加部の区別について

河内 健志 (高崎経済大学)

英語の名詞句内に前置詞が生起した場合、名詞句主要部に対して強い意味関係を持つ補部 ((1a) 下線部)と、補部ほど強い意味関係を持たない付加部 ((1b) 下線部) に分類することができる。

(1) a. a student of linguistics

b. a student with red hair

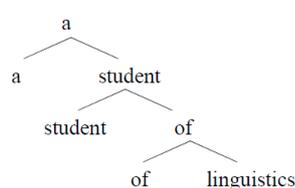
生成文法の枠組みで、理論の変遷はあるにせよ、X バー理論では (2) 示すように補部 (2a) と付加部 (2b) は構造上の差異として捉えられていた。補部は主要部と姉妹関係にあり、付加部は主要部が選択する要素ではなく、バーレベルに付加されると分析されてきた。

(2) a. [_{NP} [_{Det} a [_{N'} [_N student [_{PP} [_P of [_{NP} linguistics]]]]]]]]

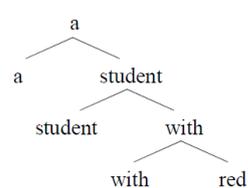
b. [_{NP} [_{Det} a [_{N'} [_N student] [_{PP} [_P with [_{NP} red hair]]]]]]

しかし、素句構造アプローチ (Chomsky 1994, 1995) では X'理論を破棄したため、節点を表示するラベル (例えば、X', XP) は理論上存在しなくなり、語彙要素の素性のみを表示し、二分枝構造のみが表示可能な構造となった。このため、(3) に示すように名詞句内の補部と付加部が構造上区別することができなくなり、さらには、X バー理論では (4b) のような補部と付加部の順序に関わる非文法性を構造に求めることが可能であったが、素句構造アプローチでは不可能となり、どのように説明されるのか不明であった。また、近年提案されているアプローチ (Chomsky 2013, 2015, 2019) においても同様の問題を含んでいる。

(3) a.



b.



(4) a. A student of linguistics with red hair

b. *A student with red hair of linguistics

そこで本発表は、現在の生成文法の枠組みでこの問題がどのように解決されるかを示す。具体的には、補部 (of linguistics)、付加部 (with red hair) は同じ作業空間で併合により統語構築され、補部は名詞句 (a student)とさらに併合し統語構築物 {a student, of linguistics}が得られる。一方、付加部 (with red hair) は統語構築物 {a student, of linguistics}には組み込まれず。その後、転送が適用され 2 つの統語構築物は適切な被修飾要素と結合し意味解釈を得ると同時に、書き出しが適用され、2 つの統語構築物は非階層的な線形順序を得ることによって、(4b) を適切に排除することができること示す。